

魔眼を持った少年

ハンモック

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔眼を持った少年、潮田渚がE組で殺せんせーを暗殺しようとする話。

※設定の違い、過去の捏造などから原作の渚くんとはいろいろ違います。（話の中でも捏造が多々あります。）

※NLにするかBLにするかは決まってないです。

↳魔眼について

タグにもあるように、この物語には少しだけ某同人ゲーム「月姫」の設定が使われています。

月姫の主人公、志貴が持つ魔眼、直死の魔眼（ちよくしのまがん）です。

直死の魔眼とは、簡単に言うと人や物の死が見える眼です。

「死の線」と「死の点」です。そこをナイフで切ったり突いたりすると対象を殺す（壊す）ことができます。

弱点などもあるのですがそれは追々。

そして志貴のように魔眼を封じ込んでおく必要があるので渚君がメガネっ子になってしまっています。

以上のことを踏まえてお読みください。

目次

プロローグ	1
一限目 渚の時間	6
二限目 野球の時間	20
三限目 カルマの時間	31
四限目 カルマの時間②	40
五限目 大人の時間	52

プロローグ

中学校二年生の最後のことだった。

「……………」

家の付近に存在する廃ビルがあった。

嫌なことがあればその屋上に行って夕日を眺めることが多々ある。都会の街並み、犇めき合うビルの上に沈んでいく夕日を見るのがとても好きで…。

今もまた、屋上の格子に寄りかかり、手元の紙をぼんやり眺めた。

中学生の生活二年生を終えるにあたって最後のテストとなる三期期末テスト。

今日はその結果が返ってくる日、

の筈だった。

僕、——潮田渚のもとに届いたのはテストの結果などではなく、

”E組への移行をお知らせします。”

そう書かれた通知書だった。

学校のクラスメイト曰く、

「E組なんかに落ちるぐらいなら、死んだほうがいい」

「E組になったらまともな人生は歩めない」

らしい。

僕らの通う高校は偏差値71の名門中学、櫛ヶ丘中学校。

A〜Dまでクラスのあるこの中学校だが、

本校舎から離れた森の中に、一つだけ古い校舎が建っていた。
その校舎に存在する一つだけのクラスを、本校舎のみんなはこう呼ぶ。

———エンドのE組。

学校の勉強に付いていけなくなった生徒、

素行が悪い生徒、

何か問題を起こした生徒は担任によって容赦なく押し込まれる。

E組におとされた生徒は、AとD組の生徒に後ろ指をさされ、馬鹿にされ、罵倒されながら学校生活を送るしかない。

元のクラスに戻るなら、とても良い成績をとるほかない。

そんな、絶望の溢れるクラス。

「……あーあ、僕も遂に、か」

どこか、予想はしていたのだ。

だって最近は何もしたくなくて、

やる気になれなくて、

職員室で僕を馬鹿にしたように笑う先生の顔が頭から離れない。

仲の良かった友人たちが驚いた顔をした後、

なぜか安心したような、それでいて馬鹿にしたような顔をしたあの瞬間が頭から離れない。

「……」

なんだか胸のあたりが苦しくなって、腹いせに通知書を飛行機に折る。

沈みゆく夕日を見つめながら、僕は空に向かってそつと紙飛行機を

離した。

紙飛行機は遠くに飛んでいく。

紙飛行機が見なくなったところで、首元のマフラーをたくし上げ、重い腰を上げた。

(三年生は、今までと違う日常になりそうだな…)

* * * * *

薄暗くなつた帰路を歩く。

実を言うと家に帰ることがいつもに比べ、とても億劫に感じられていた。

もともと僕に風当たりの強い母が僕から「E組に落ちた」という報告を聞いて平然としているわけがない。

適当に歩きながらどうしようかと考える。

あまり遅くに出歩いても警察に補導されるだけだろうし、だからといって匿ってくれるような友人は今日全て消えた。

(どうしよう…)

とりあえず近くのコンビニに寄って、あつたかい飲み物でも買おう。

———
どんっ

「わ…あっ」

「っ、すまない、大丈夫か？」

誰かにぶつかってしまい、こけそうになったが、相手が支えてくれたので転倒はなんとか阻止された。

「す、すみません!!」

「…いや、こちらの不注意だった」

低く、けれど心地の良い声に相手を見上げる。

相手の目を見た瞬間、トクリと心臓が跳ねた。

(なんて、まっすぐな目をしているのだろう)

黒いスーツに逆立った黒い髪。

男の僕から見ても整っていると感じる彼の顔。

そこに在るとても強い瞳に、思わず感嘆の声が漏れた。

「?どうした、どこか悪いのか？」

「っ、い、いえ、ごめんなさい。」

あの、もう、大丈夫なので…」

「ああ、すまない」

脇に入れられた手を抜かれ、安堵する。

もう一度見上げた彼は、何か急ぐように「失礼する」とだけ言って走り去ってしまった。

「あ…」

すぐに人ごみに紛れてしまったので後を追うことはできなかつたが、

いつかちゃんと会えたらお礼を言おう。

なぜか、まだどこかで会える気がした。

一 限目 渚の時間

突然ですが皆さんは自分の担任の印象をどう思いますか？
そんな質問を唐突にされたとしよう。

僕がそれに答えるならば、

・全身が黄色

・触手がいっぱい

・たこのような見た目

・無駄に速い

そんなところだろうか。

え？どんな担任だって？

うん、まあ信じられないよね。

だって、僕らの担任は人間じゃあない。

月を破壊したという未知の生物だった。

そんな先生がなぜ僕らE組の先生になったかというところ、それは数週間前に遡る。

E組への進級当日のこと。

E組へ続く山道を少し息を切らしながら歩く。

まだ春と言えど日差しはあったかいから少なからず汗はかく。

日陰を作ってくれる木々が唯一の救いだ。

不意に見上げた空。

視界に入る昼間ならではの白い三日月に、そういえば、と昨日のニュースを思い出した。

昨晚、たまたま付けたニュースの女性アナウンサーが、

【突然ですが、臨時ニュースです。

つい先ほど、月が七割がた蒸発し、失われたとの情報がく…】

そう言った。

画面の下に大大と書かれている”月が七割がた消滅”という文字を見て、

自分は何かミステリー番組とでも間違えたのかと思ったがそんなことはない。

どのチャンネルに変えようとそんなニュースばかりが流れ、僕は無理にでも信じざるおえなくなった。

「月が七割方消滅なんて…そんな非現実的なこと起こってもいいのかな…」

本当に起こったことなのだとしても、

一体誰がなんのために、何を思って実行するのだろうか。

そもそも人間の作業なのかもわからない。

悶々と考えているうちについて隔離校舎の入口へたどり着く。

「旧校舎」と立札の置かれた校舎は、本校舎と比べ随分とボロく、こじんまりとしていた。

校舎に入れば下駄箱が在り、上履きに履き替えて教室へ向かう。

物音一つしない教室へ入れば、ほとんど生徒が揃っていた。

誰が誰かもわからないし、どこかで見たような顔もあつた気がする。

けれど皆、一つだけ共通点があつた。

誰も彼もが、暗く、悪い顔色で机の上だけを見つめている。

きつと実感しているのだ。

この旧校舎、この教室、この席に座つた瞬間、

自分はもう、落ちこぼれなのだ。

席に座り、教室を見回す。

ボロいといつても、なんとなく手入れはされているような…？
本校舎の教師がわざわざそんなことをするようにも思えないが、
それは考えてもわからないことだ。

——キーンコーンカーンコーン

この異常に重苦しい空間に軽快なチャイムが鳴り響く。
と同時に何やら複数の足音が廊下に響いた。

「(ん？なんだ？この音…)」

靴と床のぶつかる音のほかに、なにか異様な音が付いている。
水分を含んだ何かを床にたたきつけるような、そんな音。
疑問に思っていれば、教室のドアがガラリと開かれる。

その瞬間、ここで初めてクラスの心の声は一つとなった。

「「「(…なんだあれ!?)」」」

それは僕も例外ではなく…。

僕らE組の生徒の目線の先に存在するそれ。

黄色い顔、つぶらな小さく丸い二つの目、弦月型の口。

そして、服はきているものの、その袖口からでているのは手でも足でもなくて…

「触手…」

誰かがぼつりとつぶやいた言葉が、しんと静まり返ったこの空間へ
消えていく。

その形容しがたいものの後ろから一人の男性と一人の女性が現れる。

彼らはびっしりとしたスーツを着用し、形容しがたいものの両隣へ
立った。

ざわめく教室の中、僕は男性の方を見て目を見開いた。

「(あのときの人だ：)」

いつぞやのお礼を言えなかったあの男性だと、一目でわかるほど、彼のまっすぐな目は変わっていない。

向こうはこちらに気付いていないようで、背筋を伸ばしたままただ前だけを見つめている。

不意に、形容しがたいものがこう言う。

「初めまして、私が月をやった犯人です」

「「「「……………は？」」」」

目が点になる僕らなどお構いなしに、触手は言葉をつづけた。

「来年には地球も殺る予定です。君たちの担任になったので、どうぞヨロシク」

((((……………まず5・6箇所突っ込ませろ!!))((

ずーん、と教室の空気が沈む。

それ以降、黄色いのは口を閉じ(たのかはわからないけど)、代わりに隣の彼が口を開いた。

「…あー、防衛省の烏間という者だ。まずは君たちにここからの話は国家機密だということを理解頂きたい」

彼は烏間というのか。

というかいきなりなにを言っているのだろう。

防衛省？ 国家機密？

別段それはそれ程驚くことではない。

月が壊されたのだというからそういった組織が動いてもおかしくないし…。

注目すべき点なのは、なぜそんな話を僕らにしているのか、だ。

「単刀直入に言う。

——この怪物を、君たちに殺してほしい」

今度は空気が重くなるなんてものではなかった。

空気が、凍りつく。

それはここにいる誰もが感じたと思う。

ブリザードで吹雪だ。

けれど前に立つ二人（+なんだかよくわからないもの）は平然とした顔で立ち続けている。

そもそも殺すとはどういうことなのか。

それこそ国がやればいい話であって僕らに話す必要などこれっぽっちもない。

そして僕らにメリットがあるとは到底思えない。

僕の思考を読んだが如く、烏間さんはまたも爆弾を投下した。

「あと、これは国からの正式な依頼だ。だから報酬も出る」

「報酬？ 因みにどんな感じですか？」

「この暗殺が成功したら100億、国が支払う」

「ひゃっ…」

——100億!!

「そうだ。この暗殺に成功すれば冗談抜きで地球は救われる、それを考えれば妥当な額だろう」

騒然とする教室に、烏間さんは「何を当たり前なことを…」という顔をするが、僕たちにとって100億など想像もできない大金だ。けれど言っていることは正しかった。

それほど大きな働きなら、それに見合った報酬があって当然だが、

何度も言うが根本的な話はそこではない。

なぜ一般人である僕らが、そこにいる「よく分からないものを殺して100億円を手に入れないか」という話を薦められているか、だ。ますますわけがわからなくなつて頭痛までし始めた頭を押さえていると、烏間さんはいつの間にかナイフを取り出し、それを僕らに見せる。

「どうやらそれは本物のナイフではないらしく、ゴム製で出来たゴムナイフらしいが…。」

そしてそれはあの触手にしか効果のないものらしい。

「…そして、君たちにはこのナイフと、もう一つこの素材で作られた弾が込められた拳銃でこいつを殺してほしい！」

びゅんつと風を切る音がして、烏間さんの手からナイフが消える。

「どうやら烏間さんが触手に向かってナイフを投げたらしいが、触手はずれた位置でどこか馬鹿にしたように佇んでいた。」

烏間さんの腕も相当なものだと思つたが、見る間もなく、それこそ瞬間移動のように後方に移動した触手もかなり手ごわいであろうことが伺える。

そんな僕たちが目を追いつけられていない内にも、烏間さんは新しく拳銃を取り出し発砲する。

けれど拳銃から発砲された球の先にあいつは居らず…変わり烏丸さんの後ろにのんびりと移動していた。

爪切りをもって。

……えっ？

「あなたは少し爪の切り方が甘いようですね。その証拠にヤスリを使っているのは分かりますがそれでもまだ角々しい所が残っている」

…え？

「…この通り、こいつは素早い。狙いを付けて撃つたと思って、気付けば背後に回られ手入れをされる。要するに、決して油断はするなということだ…」

何故手入れ…？全生徒がそう思う中、あいつは烏間さんの爪を切り磨き終えるその間なんと約2秒。

どこか虚ろな目をする烏間さんに同情せざるおえなかった。

マツハ20秒で動く怪物を倒すことなど、僕たちには出来るとでもいうのだろうか。

「では、後ほどこれらの武器を君たちに配布する。そして一つ、この隔離校舎外への持ち出しは原則として禁止する。繰り返すようで悪いがこれは国家でもトップレベルの機密だ、心してかかってくれ」

そうして出ていく烏丸さん達。

あの触手（…いや、もう先生と呼ぶべきだろうか）と僕らだけ取り残されたこの空間。

前の人から回された武器を後ろに回しながら思ったことはこうだ。

（なんだこれ…）

——と、まあそんな感じで月を破壊した未知の生物は僕らの担任になったわけだ。

今ではすっかり馴染んでしまい、僕らE組の生徒は先生を暗殺しようとして奮闘している。

けれど今だ成功させた生徒は居ない。

(この一年で、殺すことができるのか…)

黒板に英語の文字を綴る先生を見る。

やっぱり謎は多い先生だし、なんで先生をやっているのかもわからないし。

でもやっぱり先生を殺さないと一年後に地球はなくなってしまう。結果的に言うならば殺せばそれでいいんだ。

——殺せば、それで…

「潮田 渚君」

「っ!?は、はい」

気付けば板書をしていたはずの先生がああ食えない顔でこちらを見ている。

しまった、と思う間もなく少し怒っているらしい先生は「ちゃんと授業を聞いてないとダメでしょう」と言う。

「す、すいません」

——キーンコーンカーンコーン

僕が頭を下げたところで授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

先生は気を付けてくださいね、と笑った(?)あと、「授業はこれで終わりです」と告げる。

そして何故か窓に近寄ったかと思うと、徐に窓を開け、振り返りながらこんなことを言った。

「先生、少し麻婆豆腐を食べるために中国まで行ってきます」

突然の突風。

思わず顔を覆い、風がやんだかと思うと先生はいつの間にか居なく

なっていた。流石はマッハ20。本当に中国に行つて食べてくるんだ。

乾いた笑いが口をつき、僕は脱力した。

お昼ご飯を食べ、特にやることもなく空を見上げる。

白く存在する三日月を見て、「ああ、本当に月つて七割なくなつちやつたのかあ…」なんて考えていると、突然名前を呼ばれた。

振り向けばクラスの不良的ポジションに存在する寺坂竜馬——
寺坂が立っていた。

その両脇には取り巻きである村松と吉田の姿もある。

「どうしたの?」

「暗殺の計画練ろうぜ」

指で校庭を指す寺坂の顔はあくどい笑みが溢れていて…

(何か悪いこと考えてるな)

などと一目でわかるほどだった。

大人しく教室を出て付いていく。校庭脇にある階段に座つた三人を階段の下に居る僕は自然と見上げる形になった。

「あのタコ、機嫌によつて顔の色が変わるだろう?それについて調べとけつて言つたやつ、ちゃんとやつたか?」

人を見下す目。弱者と強者を見分ける目。

彼の目がいつまでたつても好きになれない。

少しの嫌悪感を感じながら、懐のメモ帳を取り出す。

「…舐めてる時の顔は緑のシマシマなのは知つてるよね。生徒の答案が違えば紫、合つてれば赤色、他にも昼休みの後は…」

「俺は知らなくて良いんだよ」

自分で聞いておいて!?

口元がひくつくのが自分でもわかった。

寺坂はそんな僕に気付かないのか、階段を降りてきて対先生用ナイフを突きつけてくる。

「作戦がある。アイツが一番油断している顔の時に、お前が殺りに行け」

———
殺りに行け。

平然と、そう口にする寺坂に吐き気がする。

漠然と、胸の中にどん、と入ってきた多大な嫌悪感。

思わずメガネに触れた僕を、寺坂は胸ぐらをつかみ上げた。

「嫌とか言うんじゃねーだろうなあ？あ？テメーも、俺たちも、あいつを殺して100億貰うしかこれから先生きる道なんてねえんだよ!!」
こうやって、逆上しているこいつも何かに追い込められているのだろうかと感じると、下手な口が開けなくなって、僕は「わかった」と頷いた。

満足そうに笑った寺坂が変な小包を寄越す。

「しくじんなよ」と満足そうに笑う彼等を見送った。

「…どつちにしろ、試したいことがあったし、ね」

目の奥で、チリ、と熱い光が爆ぜる。

ぶちぶちと血管の千切れる音。

赤く、黒く、陽炎のようにゆらゆらと揺れる。

目の前の世界が赤一色になっていて、僕は今、メガネを外しているのかと、実感した。

「これは渚くん、一人でどうしたんですか？」

突然声をかけられ、「うわっ」と悲鳴をあげながらメガネをかけて振り向けば、先生が立っていた。

なぜか片手にミサイルを持って。

先生どうしてミサイルを持つてるの、などと聞く気にもなれず乾いた笑いが漏れる。

「…どうもしませんよ、先生」

「そうですか。では教室へ行きましょう。五時間目に遅れますよ」
先生の後ろ姿を追う。

っていうか、そのミサイルどうするの…

「では、お題に沿って短歌を作ってみましょう。ラスト七文字を、触手なりけりで占めてください」

五時間目、国語の時間。

皆からざわめきが起きる。

当たり前だ。どこの世界に触手について短歌を詠う余人が居るんだ。

戸惑う生徒たちのために、と例文を読み上げた先生は、出来た人か

ら持ってくるように、と言う。どうやら書き終えるまで返してくれないらしい。

なんだ、好都合じゃないか。

この時間は先生が眠くなる時間帯。

教卓横の椅子に座って薄ピンクになっている先生を見て、目の奥が熱くなる。

きつと、先生はあの対先生用ナイフでは切らせてくれない。なら、どうしよう。

——本物の刃物でいいんだ。

きつと効力はないんだろうけれど、少し、線をなぞればそれでいい。

ナイフを片手に席を立つ。

周りから戸惑いの声上がるけれど、大丈夫。なぞるだけ、なんだから。

——先生の前に立って、

「おや？これはまた堂々とした暗殺ですね、渚君。

しかしそのナイフでは先生には効かないとわかっているはずでしょう？」

——メガネを外す。

「渚君？」

先生を、先生の、先生が、先生で、

腹の底からこみ上げる何かに押されるように、ナイフを振りかぶつて、それで——

「…あれ？」
ぱちり、と真つ暗な視界が開ける。
頭が鈍く痛む。
わけもわからず周りを見回すと、なぜか僕は保健室にいた。

「…。」
あのとき、僕は、ナイフを振り上げて…、それで…？

なにもわからないまま首をかしげていると、カーテンが開いた。
そこに立っていたのは先生で、いつものような何食わぬ顔でそこに立っている。

「おや、ようやく目が覚めましたか。体調の方はどうですか？ 渚君」

「あ、えっと、平気です」

「そうですか、それはよかったです」

「……、あの…先生、僕はどうして」

おそろおそろといった感じで尋ねる僕に、先生は事の顛末をすべて話してくれた。

——その後、ナイフが触れそうになった瞬間、すごい爆発音が響いたらしい。

先生は僕を庇うために脱皮をして助けてくれたそうだ。

何故そんなことになったのかというと、あの時、寺坂から受け取った小包には小型の手榴弾の玩具が入っていて、

寺坂はそれに対先生用BB弾を詰め込んで、それを爆発させたからなんだって。

寺坂達は怒った先生に叱られたらしいけど…自業自得だと思った。

「渚君、貴方も自分の体を大切にしなければだめですよ」

「…はい。すいませんでした、先生」

「ああ、それと、」

「？」

「私の呼び方は、今日から殺センサーになりましたので、ヨロシクお願いいたします」

「ころ、せん、せー？」

「はい。殺せない先生で、殺センサーだそうです。ちなみに、命名は茅野さんですよ」

茅野ってなんかずれてるよね。

ははは、と苦笑してベッドから立ち上がる。

赤い夕陽と、静まり返った校舎から、きつともうみんな帰ったのだろうと思った。

「——渚くん」

「はい」

「あまり、無茶はしないように」

はい、と返事をして保健室を出る。

——今度は、いつ試そうか。

二限目 野球の時間

水の跳ねる音が耳をつく。

先ほどまで教室に居たはずなのに、どうして僕は真っ白い場所に立っているのか。

けれどその感覚は主観ではなく、どこか客観的な感覚に近かった。きつと僕には今の状況が理解できていないんだ。

そう結論付けたところで、足元が真っ赤に染まっていることに気付く。

これはきつと夢なんだ。

そうじゃないと、

—— 僕の目の前に僕が倒れているなんてこと、あり得ない。

夢なのか、そうなのか。

なんだかフワフワしていて思考が定まらない。

考え事をしている間にも赤い液体が腰らへんまで溜まる。

倒れていたはずの「僕」も、いつの間にか立ち上がって、僕を見ていた。

「自分」の目を見て僕は思う。

なんて、怖い目なんだろう…。

青く輝く目の中には、瞳孔の輪郭をなぞる様に一つの赤い線がある。

まがまがしく輝くその目は、どこか楽しんでいるように歪んでいて…、

何故か、殺されるような気分になった。

「どうして、僕を殺したの?」

何を言っているんだろう、殺そうとしているのはそっちだろう。

言葉は声にならず、僕は赤い液体の中に沈む。
溺れる、溺れて、僕は――、

死
ぬ
？

「っ!？」

あまりの息苦しさに視界があける。

白くぼやける視界のまま、僕はやっと気づいた。

どうやら、授業中に寝ていたようだ。

そして口元にまとわりつく、黄色い触手。

「…ふぁにふぁっへるんへふか…」

「授業中に居眠りとはいただけませんねえ、授業はしつかり聞かないとだめですよ？渚君」

どうやら僕を起こすために、鼻と口を塞いでいたらしい。

殺先生は意外と悪戯好きのようだ。

殺先生はどこか満足そうな顔を見ると、黒板の方へ戻っていった。

「うー、」と少し赤くなった鼻をこすっていると、隣にいた茅野がクスリと笑うのが視界に入る。

「…なんで笑うの」

「ご、ごめん…。でも、渚が授業中に寝るなんて珍しいね？」

「…うん」

自分で言うのは何だけど、僕はまじめな部類の生徒だと思う。

授業中にお喋りなんてほとんどしなかったし、

ノートへの落書き、ましてや居眠りなんてまったくくだ。

だから、こんな風に居眠りをしてしまうなんてこと、初めてだった。

「(しかも変な夢を見るし…)」

本当に、なんであんな夢を見てしまったのだろうか…。

……………？

そこでハタと気付いた。

「あれ…」

僕は、どんな夢を見たんだ？

数秒間静止し、考える。

けれど、どんなに頭を捻つても、夢の内容がまったく思い出せない。

まあ、それほどどうでも良い夢だったんだろうな。

結論付けたところで、茅野が僕を小突いた。

「？」

「ね、渚、杉野、今朝暗殺失敗したんだって？」

「うん…」

返事をしながら、僕は今朝のことを思い出した。

朝、HRの前に校舎裏の山道でくつろぐのが先生の日課だ。

僕と杉野は、そんな僕の情報に沿って、その通りにくつろいでいる先生を、木の陰から盗み見していた。

「お前の情報通りだ、サンキュー。」

「うん、頑張ってるね、杉野」

提案者は杉野で、そのくつろいで油断している瞬間を狙うつもりだ。

杉野が得意げな顔で取り出した野球ボールには、対先生用のBB弾が満遍なく埋められている。

何故野球ボールかと問われれば、それは杉野が野球を好きだからだ。

昔は野球部にも所属していたらしい。

「おう！百億円は、俺のものだ」

杉野が、その場で先生を狙って野球ボールを構える。
大きく振りかぶって…、

——投げた。

「おはようございませす」

「っ!？」

「なっ」

投げたはずのボールが届く前に、後ろからの突然の声に僕らは息を呑む。

慌てて後ろを振り返れば、そこには先ほどまで椅子に座っていたはずの先生が何食わぬ顔で立っていた。

「さあ、挨拶は大きな声で」

「え、ええ、えっ!？」

「お、おはようございませす。殺先生」

戸惑う僕の目線の先にあるのは、先生よりも、先生の触手にはまったグローブと杉野が投げたはずのボールだった。

「ああ、これはですねえ、先生にボールが届くまで暇でしたし、直に触ると先生の細胞が崩れてしまう。」

そんなわけで、用具室までグローブを取りに行ってきたし。
「ずががーん、と杉野に多大なショックが走る。」

流石マツハ20で動く超生物。

その馬鹿にした緑色の縞模様が腹立たしいです。

「殺せるといいですねえ？卒業までに」

「それからあいつ、すっかり元気なくして…」

僕らの目線の先に、重い溜息を吐く杉野が映る。

余程ショックが大きいのだろう。

「あんなに落ち込むこと無いのにね。今まで誰も成功してないんだから」

結局、そうだった気持ちは、やった本人以外理解できないことなんだろうと思う。

けれど、あの先生を殺すことができる人なんて、存在するのだろうか。

そんなことを考えていると、殺先生がちらりと何処かへ視線を向ける。

そして、黄色い触手が教室の後ろの方へ走り抜けた。

「!?」

「菅谷くん」

低い声で菅谷を呼ぶ先生の手元には一冊のノート。

一体、どうしたというのか。

クラス全員がはらはらと緊張する中、先生は「惜しい」と軽快な声を上げる。

「先生はもつと、しゅつとしお顔ですよ」

先生が見せるノートには、菅谷の落書きに書き足された（先生曰く、）しお顔の先生が居た。

「どこが!?!」

前言撤回、今にも殺せる気分だ。

放課後、先生はいつもと違って早めに帰って行った。

なんでもニューヨークにスポーツ観戦してくるそうだ。

「先生もたまにはお土産買ってきてくれたらいいのに」と言う倉橋さんを筆頭に、喋りだしたクラスメイト達に苦笑しながら教室を出ようとすると、いつの間そこにいたのか、いつかの烏間さんが立っていた。

「あ、烏間さん」

「どうだ、奴を殺すような糸口は掴めそうか？」

「糸口…」

一気にクラスの空気が重くなる。

はつきり言つて、そんなものは未だに掴めていない。

確かに皆、先生を殺そうと奮闘はしているけれど、はつきり言つて今の環境を楽しく感じている部分もある。

そんな僕らと違って、防衛省の人たちは殺先生の暗殺を急いでいるのだろうか。

誰もが言葉に詰まる中、ほっそりとしたガラ悪い系女子の狭間さんが口を開く。

「つていうか、あたし達、E組だし…?」

狭間さんのセリフに、磯貝くんも「無理ですよ、烏間さん」と苦い顔をした。

口々に無理だと告げる生徒に、烏間さんはああ、と頷いた。

「そうだな、どんな軍隊にも不可能だ」

そのセリフに同意を求めるクラスメイトに、烏間さんは「だが、」と言葉を続ける。

「君たちにはそのチャンスがある」

「えっ」

「奴はなぜか、君たちの教師だけは欠かさないんだ。

タイムリミットは来年の三月。奴は必ず地球を爆破する。削り取られたあの月を見ればわかる通り、そのとき、人類は一人たりとも助からない。

奴は、生かしておくには危険すぎる。

この教室が、奴を殺せる唯一の場所なのだ」

その一つたりとも間違いのない言葉に、僕らは言葉を失った。

殺先生と日々を共にする僕らには、全世界を救うヒーローになるチャンスが与えられている。

けれど、わからないことだらけだ。

先生が地球を壊す意味も分からない。
先生が僕らの担任をする意味も分からない。

——ああ、わからないことだらけだ。

次の日の昼休み、ふと課題を提出していなかったことを思い出した。

「やばい、課題提出しないと…」

急いで教室を出ると、廊下の窓から殺先生と杉野が一緒にいるのが見えた。

「…何話してるんだろう?」

ちよつとした好奇心もあって、二人のもとへ走る。

裏庭へ続くドアを出た瞬間、目の前の光景に目を見張った。

「か、」

——絡まれてる!?

殺先生の触手によって、杉野が凄いことになっていた。

いや別にそういう意味じゃないから。

そんなことを考えている場合ではないと急いで二人に近寄る。

「何してんだよ殺先生!」

「ヌルッフッフ…、杉野君? 昨日見せた、癖のある投球ホーム。」

メジャーに行った有田投手を真似ていますね?」

「!!」

野球に詳しくない僕には何の話かさっぱりだが、杉野の顔色からしてどうやらその情報は当たっているらしい。

「でもね、触手は正直です。有田投手に比べて、君の肩の筋肉の配列は非常に悪い」

「っ…、どういう、ことだよ」

「君の体では、彼のような剛速球は投げられません。」

「どれだけ有田選手のまねをしても無理です」

それは、今までそうして頑張ってきた杉野への、完全な否定だった。絶望的な顔をする杉野に、僕は思わず口を開いていた。

「なんで？なんで、先生にそんな断言できるんだよ。」

「僕らが、落ちこぼれだから？エンドのE組だから？」

勢いの乗った口は、止まらない。

「やっても無駄だって、そう言いたいのか!?!」

叫んだあとで、熱くなった頭から温度が消えた。

荒げた言葉に少し早い息を吐く。

先生は僕の言葉に対して、顔色をかえるわけでもなく、

「そうですね、なぜ無理かと言うと…、

「昨日日本人に確かめてきましたから」

そう言つてアメリカの新聞紙を取り出した。

新聞の見出しには、大きく有田選手と彼に絡みつく先生が映っている。

「確かめたんならしようがない!?!」

サインも貰いましたよ？と言つて見せられた色紙には「ふざけんな触手!!」とだけ書かれていた。

先生涙目になってるけどそれ当たり前だよ！

そんな状態でサイン頼んでもまともなこと書いてもらえないよ!!

脱力したため息が漏れる。

隣から、「そっか」となんだか落ち込んだような声が出て、思わず杉

野を見た。

「やっぱり、才能が違うんだな」

そう呟く杉野を見て、僕はなんとなく殺先生の言いたいことがわかった気がしたんだ。

違うんだよ、杉野。

才能とか、そういう話じゃなくて――。

「一方で、肘や手首の柔らかさは、君の方が素晴らしい。

鍛えれば、彼を大きく上回るでしょう」

杉野には、杉野に合った、やり方があるんだよ。

「君に合った暗殺の才能を探してください。」

「俺の、才能かあ」

ぼつりと杉野は呟く。

けれどその顔は、まるで新しい何かを見つけたように、きらきらと輝いていた。

杉野の笑顔を見て、自分の顔も綻ぶのがわかる。

校舎に戻っていく先生を思い出して、僕は急いでそのあとを追いかけた。

「殺先生!!」

「ん?」

「まさか、杉野にアドバイスをするためにニューヨークへ…?」

「もちろん。先生ですから」

「や、普通の先生はそこまでしないよ。」

ましてや、これから地球を消滅させようとする先生が…」

僕の言葉に、先生は何かを懐かしむような顔をして、なんだかいつもより穏やかな声で僕の名前を呼ぶ。

「渚君。先生はね、ある人との約束のために、君たちの先生になりました」

「え？」

「私は地球を滅ぼしますが、」

「気付けば手元のノートが消えていて、高速で丸付けをする先生をみて呆気にとられる。」

「その前に君たちの先生です。君たちと真剣に向き合うことは、地球の終わりより大切なのです」

「っ、殺先生…」

感動しながら手元のノートに視線を落とした瞬間言葉を失った。

「ノートの裏に変な問題書き足すのやめてくんない」

「にゅやっ!？」

「採点スピード誇示するのはわかるけどさあ…」

「ボーナス感があって喜ぶかなと…」

「寧ろペナルティだよ…」

「そっ、そんなわけで、君たちも生徒と暗殺を真剣に楽しんでください？」

「ま、暗殺の方は無理と決まっていますがね」

「そう言つて馬鹿にした顔でペンを食べる先生に笑いしか出ない。」

「笑う僕に、不意に先生が「そういえば、」と声を上げた。」

「昨日、とてもきつそうな顔をしていましたが？どこか体調が悪いんですか？」

「え？いえ、全然…」

「そうですか、ならいいのですが…」

——否定しながらも、視界の隅に赤が見えた気がして、僕は思
わず眼鏡に触れた。

三限目 カルマの時間

「1、2、3、4、5…!!」

体育の時間、僕はナイフの素振りを練習していた。

殺先生の授業は至って普通の体育だったが、今僕らの体育の監督をしているのは殺先生ではない。

防衛省の、烏間さんだ。

いや、今は烏間先生と呼ぶべきだろうか。

烏間先生は前日から僕らの体育の先生を担当することになった。

理由は僕らの暗殺力増加といったところか…。

素振りをしながら、前日のことが頭に浮かんだ。

いつも通りの休み時間。

殺先生は裏庭でかき氷を作っていた。

わざわざ北極から仕入れてきた本場のかき氷だ。

そして、そこを狙う六人の生徒が居た。

暗殺にいそしむ僕らにとって、どんな隙であろうと狙うのが常識だ。

その男女六人の生徒、——磯貝君、前原君、三村君、片岡さん、矢田さん、岡野さんは、懐に忍ばせたナイフを確認し、目で合図を送りあう。

それぞれが準備万端だとわかると、一斉に物陰から飛び出した。

「先生！俺らにもそのかき氷、食わせてくれよ!!」

それに気付いた先生は涙ぐむ。

ああ、ついに生徒が自分に心を開いてくれたのか、と。

その瞬間、彼らがナイフを取り出し一斉に飛び掛かる。

それがわかっていたかのように、殺先生は動くが早いか…派手に風を巻き上げながらマツハ20で移動した。

「笑顔が少々わざとらしい。油断させるには足りませんね」
言いながら、先生は手元の布を地面に落とす。

「こんな危ない対先生用ナイフは置いておいて…」

いつの間に取ったのか、先生の落とした布に、彼らのナイフはくるまれていた。

そして――、

「花でも愛でていい笑顔から学んでください?」

ナイフを持っていた生徒の手には、とても素敵なチューリップが…。

って、あれって…

「!?ってというか殺先生!!この花クラスの皆で育てた花じゃないですか!!!」
「にゅやっ!?!」

やっぱり…。

思いながら花壇を見れば、そこに在ったのは無数のクレーターで、綺麗に咲き誇っていたはずのチューリップは消えてしまっている。

あーあ、なんてことを…

殺先生に視線を戻せば、案の定女子から凄い非難を受けていた。

お詫びにと花壇に新しく球根を植えている先生を見ながらメモを取る。

先生は、カッコをつけるとボロが出る――、と。

「渚!」

「ん?」

「何メモ取ってるの？」

「先生の弱点を、書き留めておこうと思ってさ…そのうち、暗殺のヒントになるかと思って…」

「ふうん？」

メモを覗き込んだ茅野に、「その弱点役に立つの？」と聞かれて返事のしようがなかった。

や、役に立つ日があるかもしれないじゃん…

なんと返答するか考えあぐねていると、誰かにメモを取られた。

視線を上げれば杉野がさわやかな笑顔で立っている。

「なーに言ってるんだよ！役に立つかもしれないだろ？」

ページを捲った杉野は、僕がメモした先生のことを読み上げるが、顔がだんだんと苦くなってくる。ついには「なにこれ」と真顔で言われる始末だ。

ほっというてよ!!

そうこうしていると、なんだかとても嬉しそうな顔をした磯貝君が、「渚！」とこちらに駆け寄ってきた。

「どうしたの？磯貝君」

「先生がチューリップ引っこ抜いたお詫びにハンディキャップ暗殺大会させてくれるんだってさ!!」

え？

聞き返す前にお前らも校舎から武器持って来いよ！なんて言って走って行ってしまう。

茅野も、私も行ってくるなんて走って行ってしまおうし…

とりあえず、どうしようもなくなったので一体何が起こったのかと僕は殺先生のもとへ向かった。

正直、木の枝に吊るされて攻撃されようと殺先生は早かった。

下からみんなが攻撃するも、ものすごい速さで避けきっている。

呆気にとられながらそれを見てみると、茅野が自家製の槍をもってこちらに来ていた。

その後ろには烏間さんが立っている。

今日はいつたいたいどうしたのだろう。

「どう？渚…」

「う、うん…完全に舐められてる…」

「これは最早暗殺と呼べるのか…？」

冷や汗をかく烏間さんに苦笑しながら僕はあることを思い出した。

つい先ほどもそうだったが…

「殺先生の弱点からすると…」

——カッコを付けると、ボロが出る。

その瞬間、先生が吊るされていた木の枝が折れた。

一瞬の沈黙の後、一気に慌てだした先生に生徒が次々と襲い掛かる。

茅野が横で苦笑しながら、「弱点メモ、役にたつかも…」と呟いていたが確かにそうかもしれない。

「そういえば、烏間さんはなんでここに？」

「ああ、俺も今日からここで先生をすることになった。

改めて、体育担当の烏間だ。よろしく頼む」

「あ、はい。僕は潮田渚です。よろしくお願いします」

「渚君か、君と会うのは三回目だな。」

三回？

先生が学校に来たのは二回だったはずだが…

首をひねったところでそういえば、と思い出す。

いつぞやのぶつかった男性。あれは烏間さんだった。

覚えてたのか…

そう問いかければ「いや、言うタイミングが無くてな…」と少し落ち込みながら答えられた。

責めてるわけじゃないですよ、と返せばそうか、とだけ返ってくる。

この先生とはうまくやっていけそうだ。

そんな感じで僕らを鍛えようと烏間先生はここにいる。
やっぱり、いつまでたつても烏間先生のあのまっすぐな目は変わる
ことがなかった。

「八方向から、ナイフを正しく振れるように！」
皆で掛け声を上げながらナイフを振る。

なんて異常な日常…。

真面目に素振りをしていると、殺先生と烏間先生の会話が耳に入っ
てきた。

「体育は今日から俺の受け持ちだ」

「ちよつと寂しいですね…」

「この時間はどっかに行つてろと言つただろう。そこの砂場で遊んで
ろ」

言われたとおりに砂場に行く殺先生ってどうなんだろう。

「うう、酷いですよ、烏間先生。私の体育は、生徒から評判良かったの
に…」

「嘘つけよ、殺先生身体能力が違いすぎんだよ」

殺先生の言葉に、思わずといった感じで菅谷君が声を上げた。

周りの皆もあきれたように動きを止める。

菅谷君の言い分に、そういえば、といつぞやの体育の時間を思い出
した。

あれは確か反復横飛びをするとき、見本の先生があまりの速さです
るものだから、皆できるか！とブーイングを付けていたっけな…

「体育は人間の先生に教わりたいわ…」

杉野の言葉が決定打になったか、先生の落ち込みようはすごい。

「よし、授業を続けるぞ」

「でも烏間先生…こんな訓練意味あるんすか？しかも、堂々とター

「ゲットが居る前でさあ」

疑問の声を上げたのは前原君だが、それは至極当然な質問なので止めるものは誰もいない。

先生は一度瞬きした後口を開いた。

「勉強も暗殺も同じことだ。基礎は身に着けるほど役立つ。磯貝君、前原君、前へ」

唐突に呼ばれた二人は戸惑いながらも前へ出る。

「そのナイフを俺に当ててみる」

「えっ、い、良いんですか?」

「二人、がかりで?」

「そのナイフなら、俺たち人間に怪我はない。掠りもすれば、今日の授業は終わりでいい」

動くが早いのか、磯貝君は眼を鋭くさせると真っ先に飛び掛かる。

体を反転させて避けた鳥間先生のその後ろから今度は前原君が襲い掛かる。

鳥間先生はそれを受け流しながら口を開いた。

「このように、多少の心得があれば、素人二人のナイフぐらいは俺でも捌ける」

その言葉にカチンときたのか、同時に襲い掛かる二人を何食わぬ顔で受け倒しながら、鳥間先生は言葉を続ける。

「俺に当てられないようでは、マツハ20で動くような怪物に当てられる確率は皆無だろう」

確かにその通りだ。

けれどあの二人はこのクラスでも運動神経はいい方。

そんな二人が当てられない、ましてや捌かれるほどならば、このクラスで先生にナイフを当てられる者なんてまず居ない。

「見ろ！今の行動の間に奴は、砂場に大阪城を作ったうえに、着替えて茶まで点でている」

なんで!?

「クラス全員が、俺に当てられるようになれば少なくとも暗殺の成功率は格段に上がる。

ナイフや狙撃。暗殺に必要な基礎の数々。体育の時間で俺から教えさせてもらう。

では、今日の授業はここまで」

「ありがとうございます！」

鳥間先生：やっぱり凄い人だ。

「六時間目は小テストかあ…」

グラウンドを歩きながら隣にいた杉野がぼつりと呟く。

「体育で終わって欲しかったねー」

はあ、と溜息を吐いて前に視線を戻すと、小階段の上に人影があるのを見て目を見開いた。

——あれは、

杉野も僕の様子に気付いたようで立ち止まる。

彼はどこかあくどい笑みを浮かべていて、

制服はものの見事にき崩されている。

赤い髪を靡かせて、

黄金色の目を細めながら、彼は、

「よお、渚君、久しぶり」

それだけを、言った。

赤羽 カルマ。

確か暴力行為を繰り返して停学になっていたはず。

「カルマ君、帰ってきたんだ」

僕の言葉に、カルマ君はにこりと笑った。

そして僕らの後ろの方を見て、驚いたように目を見開くと、

何か納得したように階段を降りてきて、僕らの間を通過した。

「あれが噂の殺先生？すっげ、本当に蛸みたいだ」

笑いながら近寄るカルマ君にどこかうすら寒いものを感じる。

彼は殺先生の目の前まで行くが遅刻したことに怒る殺先生にあからさまな平謝りをしながらよろしく、と手を差し出した。

殺先生もなんだかんだで嬉しそうに、こちらこそ。そう言つて、手を差し出す。

二人の手がしつかりと触れた瞬間。

——ビシヤツ

先生の手は弾け飛んだ。

「っ!？」

「あははっ」

驚く先生。

その隙を逃さずナイフで襲い掛かるカルマ君。

とっさに避けた先生は、冷や汗を一筋流した。

なにより僕が驚いたのは、

「へえ? ホントに速いし…ホントに効くんだったこのナイフ…」

彼の手の平に対先生用ナイフの断片が張り付けられていたことだ。

汚い手口だが、先生にダメージを与えたのは彼が初めてだ。

その事実にも、ここにいる誰もが動けないでいた。

そんな僕らの心情を知つてか知らずか…カルマ君は何故か眉をハの字にさせる。

どこかがつかかりしたような、貰ったおもちゃが望んだものではなかったような、そんな顔。

「けどさあ先生。こんな単純な手に引つかかるとか…しかも、そんなとこまで飛びのくなんて、ビビりすぎじゃね？」

殺せないから殺先生つて聞いてたけど…」

目の前まで来たカルマ君に一步先生が後ずさる。

彼はそれを見て、より一層笑みを浮かべた。

「先生つてもしかして、チョロい人？」

その言葉は先生をイラつかせるには十分だったようで、見る見るうちに先生の顔が真っ赤に染まっていく。

けれど先生は規約として生徒に手を出すことができない。きつと、カルマ君はそれを承知の上で挑発してるんだ。

「ねえ渚ー。カルマ君ってどういう人なの？」

いつの間にかとなりに来た茅野がそう訊ねてくる。

「うん…一年、二年は同じクラスだったんだけど…二年の時に、続けざまの暴力行為で停学くらって…」

このE組にはそういう生徒も落とされるんだ。

でも、今この場じゃ優等生かもしれない」

「ん？…どういうこと？」

「凶器とか騙しうちなら、多分、カルマ君が群を抜いてるはず」

———
楽しそうにナイフを回す彼を見ながら、目の奥がチリ、と熱くなるのを自覚した。

四限目 カルマの時間②

六時間目、小テストの時間。

問題を解いている最中のクラスの皆はその音がうるさくて仕方がなかった。

その音、というのは、

「殺先生が触手で壁を叩く音である。」

ぺたぺたぺたぺたと…、カルマ君の騙しうちにあって落ち込んでいくというのとは分かるが場をわきまえてほしい。

遂に耐え切れなくなったか、岡野さんが顔を鬼のように変貌させた。

「あああ!!もう!!ふによんぷによん煩いよ!!!小テスト中でしょ!!」

よく言った、岡野さん。

「こ、これは失礼!!」

慌てて先生が姿勢を正す、

やっと静かになったかと思っただのもつかの間、後ろから寺坂とその取り巻き達の声が響いた。

「よおカルマ!大丈夫かあ?あの化けモン怒らせちまってよお」

「どうなっても知らねーぞ?」

「またお家に籠ってた方がいいんじゃない?」

挑発するような、馬鹿にするような声色の三人に気にした風もなく、カルマ君は首をかしげながら笑う。

「殺されそうになったら怒るの当然じゃん寺坂あ。しくじってちびっちやった誰かの時と違ってさ」

「っ!!ちびってねーよ!!てめえ喧嘩売ってんのか!?!」

二人の仲裁に入る先生を見て同情を禁じ得ない…。

———
チリ、

「っ!?!」

突然目の裏に酷い痛みを感じて思わず両目を覆った。
なんだ、これ…
脳をかき回されているような酷い痛み。

痛い、痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
イタイ痛いいたい痛いイタイイタイいたい痛い。

頭を押しつぶされているようで、

頭を切り離されているようで、

頭が、

あた、ま

が、

いた

い

あまりの痛みに耐えきれず、僕の意識は闇に吞まれた。

「……」

ふと目を開く。

あたりを見回せば、いつぞやの保健室に居た。

心地よい風と共に赤い夕陽が室内を煌々と照らす。

「あ、目、覚めた？」

しんと静まり返った保健室で声が響いた。

横に視線をずらせば、赤い髪少年が立っている。

誰？

そう言いかけて何を言っているんだと思った。

彼は赤羽カルマ。

僕は潮田渚。

なんだ、それだけのことか。

「どうして、カルマ君が？」

「あー、俺は渚君に聞きたいことがあってさ、放課後も誘おうと思ってただけど、六時間目急に倒れるから吃驚したよ。

渚君ってなんか体弱かったっけ？

まあちっさい体だとは思っけど」

なんて失礼なことを言うのだろうと。

怒る前になんだか笑えて、クスリ、と笑ったらカルマ君が大分良いみたいだね、とぼやいた。

なんだか考え込んでいるようで、どうしたのか尋ねる。

「…んー、渚君って、そんな目の色してたんだな、って」

わけがわからない。

眼鏡は外れていても、目の色が変わることなんて無いはずなのに。ズボンのポケットに入っている手鏡を取り出して、自分の顔を映す。

——そこにはいつかどこかで見たような気がする僕が、居た。

駅に向かってカルマ君と二人歩く。

カルマ君の聞きたいこと、それは僕がメモする殺先生の弱点のことだったらしい。

特に隠す理由もないので全て教えたころ、僕らは駅のホームへ辿り着く。

タコとか言ったら怒るかな？と問うカルマ君にタコは先生のトリードマークだと教えたところで、こちらを嘲りながら話す二人の男子生徒に気が付いた。

僕が元居たクラスのもの、嫌な男子生徒二人だ。

「おいおい見ろよ、渚だぜ？」

「うわ、隣にいるのって赤羽カルマじゃん、

あいつすつかり馴染んでるし、もう俺らのクラスに戻るのなんて無理じゃね？」

「うつわ、マジ最悪。ほんと、死んでもあそこには落ちたくねーわ」
くすくすと笑う、彼等。

それを見てもなんの感情も浮かんでこず、カルマ君に向き直ったとき、彼はあの生徒たちの方へ歩き出していた。

その手にはいつの間にか拾ったのか酒瓶が握ってある。

気付かずお喋りを続ける彼らに向かってそれを振り上げたかと思うと、

一気にそれを投げた。

——ガシャンツ

鋭い音を立てて柱に当たった瓶が割れる。

「ヒッ」

「へえ？死んでも嫌なんだ？じゃあ、

今、死ぬ？」

にこにこ笑いながら言う彼に、二人組は顔を青くして一目散に逃げていく。

カルマ君はそれを見ても面白そうに、けれどつまらなそうに笑うだけだった。

「ははっ、やるわけないじゃん。ずっと良い玩具があるのに、また停学

とかなる暇ないし」

こちらに戻ってきたカルマ君は、本当に楽しそうで…。

彼はそういえば、と目を細めた。

「俺、すっごくいくだんないこと思いついちゃったんだあ」

「カルマ君、次は何企んでるの？」

「俺さあ、嬉しいんだ」

ちゃんとした返答じゃない、いきなりなんだと呆気にとられる僕を振り返りながら、震える声で彼はぼやき続ける。

「あいつが、ただのモンスターならどうしようかと思つてたけど、案外ちゃんとした先生で。ちゃんとした先生を殺せるなんてさあ、ふっ、前の先生は…」

ベルを鳴らして、風を巻き上げながら、向かいの電車が通り過ぎていった。

「自分で勝手に死んじやったから」

彼は、夕日を背にしてどこまでも嗤う。

翌日、心配性が激しい過保護な杉野に、「具合は大丈夫か」、「学校来ていいのか」と散々尋ねられながら教室に入って、僕らは静止した。と、いうよりも教卓の上にあるものに目が釘付けになって動けないと言った方が正しい。

戸惑う僕らにふらりと近づいてきた人——カルマ君は「渚君」と片手をあげた。

なんとなくはわかっていたが、これは彼の仕業だろう。

「え、と、カルマ君、これは？」

「んー、あの先生タコがトレードマークなんじゃないかって言ってたじゃん。」

だからさ、タコの死骸でも置いとけばどうかなーって」

口元がひくり、と戦慄いた。

教卓の上で脳天から刺されて血を垂れ流すタコを見て血の気が引くのがわかる。

碌にコメントもできず自分の席に着いて、周りを見回した。

皆自分の机ばかりを見て、教室全体の空気が重苦しく、まるで進級日当日に戻ったような気さえしてくるほどだ。

カルマ君だけは楽しそうに鼻歌まで歌っている。

そして、始業を始めるチャイムが鳴った。

ガラリ、教室のドアが開けられ殺先生がやってくる。

彼はいち早くこの教室の空気の異常さに首を傾げた後、教卓を見て動きを止めた。

「あつ、ぶっつめーん。殺先生と間違えて殺しちゃったー。捨てとくから持って来てよ」

明らかに挑発する態度のカルマ君。

殺先生がどんな対応をするのか気になって、黙って見ていると、

先生は溜息を吐いてタコを持ち上げた。

そしてカルマ君の席の前まで来ると、突然、触手をドリル型へと変える。

「!？」

カルマ君も、これは流石に予想していなかったのか目を見開く。

次の瞬間、先生はいつの間にか、いつかどこかで見えたミサイルを持っていた。

持っているのはそれだけではなく――、

「(あれは……)」

「見せてあげましょうカルマ君。このドリル触手の威力を。」

自衛隊から奪っておいたミサイルの火力を……!

先生は、決して暗殺者を無事で帰さない」

何をやっているのか速すぎて見えないが、先生は突然カルマ君の口に何かを突っ込んだ。

「!? あっつー!」

カルマ君が口から落としたもの、それは、

「たこ…焼き…」

「その顔色では、朝食を食べていないでしょう。マツハでたこ焼きを作りました。」

これを食べれば、健康優良児に近づけますねえ。はいあーん」

何食わぬ顔でたこ焼きを差し出す先生に、カルマ君はふぎけるなどという顔で睨みつける。

「カルマ君、先生はねえ、手入れをするのです。」

錆びてしまった暗殺者の刃を。

今日一日、本気で殺しに来るがいい。その度に先生は君を手入れする」

「くっ」

悔しそうに唸るカルマ君は冷や汗をかいていた。

喧嘩を売ったカルマ君。

そして、今、先生は確実にその喧嘩を買った。

暴力ではなく、手入れという形でカルマ君を迎え入れると、先生はそう、断言したのだ。

——その通りに事は運ぶ。

例えば一時間目の数学。

板書をノートに写していると、突然先生の触手が動いた。

「あー、カルマ君? 銃を出して撃つまでの間が遅すぎます。暇だったので、ネイルアートをに入れておきました」

どうやらカルマ君が銃で撃とうとしたらしい。

まあ失敗に終わったけど…。

そして四時間目、家庭科。

不破さんの班の料理を先生が味見しているところにカルマ君が
ちよつかいをかけて返り討ちにされていた。

ハート柄のエプロンと可愛いナプキンを付けられたカルマ君は悔
しそうだった。

最後に五時間目の国語

言うまでもなくカルマ君は先生を殺せなかった。

先生に警戒されている以上、初対面の時のような行動はできない
し、ましてや殺すなどもつての外だ。

放課後、裏庭の崖際に生えている一本の木に座りながら、カルマ君
は気が立っているようだった。

まあ、無理もないと思う。

暗殺が失敗するならまだしも、あんなふうにあしらわれては余計に
赤っ恥をかくだけだ。

カルマ君の後ろに立って、空を見上げる。

雲が満遍なく広がり、一雨来そうな空の色。

「カルマ君。焦らないで、皆と一緒にやっつていこうよ」

気付けば、そんなことを口走っていた。

「殺先生にマークされちゃったら、どんな手を使っても一人じゃ殺せ
ない。普通の先生とは違うんだから」

「…先生、ねえ」

何かが引つかかったのか、カルマ君はぼつりと呟いて物思いにふ
けてしまった。

そして何かを思いついたかのように囁く。

「やだね、俺が殺りたいんだ。変なところで死なれんのが一番むかつく」

言い終えたところで、突然殺先生が現れた。

「カルマ君、今日はたくさん先生に手入れされましたね。

まだまだ殺しに来てもいいですよ。もっとピカピカに磨いてあげ
ます」

「(先生…完全に馬鹿にしてる…)」

先生のセリフを聞いたカルマ君がどんな反応しているのか、気に

なって彼を見ると、彼は笑っていた。

徐に立ち上がり、

「確認したいんだけど、」

と、なぜか軽快な声を出す。

「殺先生って”先生”だよな?」

カルマ君が何を企んでいるのかわからない。

——だけど、それは何かやろうとしているときの顔つきだ。

「はい」

「先生ってさあ、命をかけて生徒を守ってくれる人?」

——。

「もちろん、先生ですから」

——次のカルマ君の言葉を聞いた瞬間、僕は彼が何をやろうとしているのか悟った。

「そっか、良かった」

——
!!!!

「なら、殺せるよ」

彼が取り出した拳銃は撃たれることはなく、彼はその体制で後ろに傾く。

あ。

声を漏らす間もなくカルマ君が消えた。

いつか、どこだったか、僕はそんな光景を、見ていた気がする。
落ちたのが誰だったのか、何故落ちたのかわからないけど、
落ちて、潰された彼は、彼女は、ぐちゃぐちゃに引き裂かれて、苦
悶の表情を浮かべていた。

赤く染まっていく彼を見つめながら、何をやっているんだろう、こ
の人、と、何も理解できないままに居た。
そして、彼の死を理解した瞬間…

僕は、”彼”を、殺したんだ。

「あ、ああ、……」

目の裏がチリチリする。

視界が真っ赤に染まる。

あかく、くろく、なにもかもが入り混じって、…

やめて、やめて、

や

め

て

「渚君!!!」

「っ……」

視界が赤からいつもの世界に戻る。

あれ……僕は……

不思議に思いながら視線をあげれば殺先生と怪訝そうな顔をしたカルマ君が立っていた。

その間に先ほどの刺々しい雰囲気はなく……、いつの間に和解したのだろうか？

「大丈夫ですか？カルマ君を助けて上に戻ってきたら貴方が倒れているので吃驚しましたよ」

「え、倒れて……？」

「やっぱり、体調が優れていないんじゃない？」

「……いえ、大丈夫です」

これ以上先生を心配させるわけにもいかず、首を横に振った。

それでも心配そうな顔をする先生にカルマ君が言う。

「大丈夫だって本人が言ってるんだから。」

それよりも、渚君。体調が大丈夫なら俺となんかメシ食いにいこよ」

「えっ」

「今そこでお金拾ったんだあ」

そう言ってカルマ君が懐から取り出したのは……先生の財布だった。

途端に言い合いを始める二人。

僕はふと、あることが引っかけかかってカルマ君を見た。

「ねえ、カルマ君」

「ん？」

「カルマ君、自殺願望でもあったの？」

「え、はは、面白いこと言うね渚君。殺先生っていう面白い玩具があるのに俺が死にたいなんて思うわけないじゃん。俺は殺先生を殺したかっただけだし」

「…そう、だよね」

「——って、先生は玩具じゃありません!!!渚君も納得しないでください!!」

騒ぐ二人を遠目に、僕は崖っぷちにいるような気分になった。

さつき、カルマ君に質問した時に漠然と、何の支障もなくすんなりと入ってきた考え。

——もし、カルマ君が死にたいと願うのならば…僕が…

かき消すように二人の輪の中に入る。

いくら騒ごうと、

——頭の片隅に、赤い何かがちらついた。

五限目 大人の時間

「渚、お前また倒れたんだって？本当に大丈夫かよ。なんかあったら頼ってくれなきゃ親友の名目丸潰れだぞ……」

「あ、あはは……ごめん。べつに体調が悪いわけじゃないんだ。それは本当だよ。ありがとう、杉野、心配してくれて」

「ならいいけどさー、と席に戻っていく杉野に苦笑しながら先日のことを思い出す。

カルマ君の一件の時、殺先生は僕が倒れていたという。

最近、やたらと倒れることが多いと感じる。

最初に、寺坂の案に従って殺先生を暗殺しようとしたとき。

先生が守ってくれたにも関わらず、僕は意識を失っていた。

次は、先日の小テストの時。

目の奥の激痛に耐えきれず気絶した。

そして次の日。カルマ君が飛び降りたと同時に一時的に意識を飛ばしてしまい、殺先生に凄く心配された。

——正直、とても怖い。

何が怖いかっていうと、自分の体の筈なのに何もわからないことだ。

「(僕の体に、一体何が起きているんだ)」

ただ、一つだけわかるとすれば……

思い当たる原因、自分の瞼にそつと触れる。

ここ最近、目の奥が燃えるように熱くなる時がある。

その瞬間、見覚えのない映像が瞼の裏をよぎる。

収まれば、映像も消えて、自分が何を見たのかさえ忘れていた。

——わからないことが、怖い。

身震いしたところで始業のチャイムが響く。

はまっていた思考の渦から意識が戻り、教卓を見た。

いつも通りに入ってくる殺先生と烏間先生の後ろに、見知らぬ外人が居る。

「(美人だなあ…)」

岡島君あたりが興奮してそうだ、なんて苦笑したところで、その外人があまりにも殺先生にひつつきすぎていることが分かった。

一体何があったというのか。

外人さんは白い肌を紅潮させて体をくねくねとさせながら殺先生にくつついている。

烏間さんは訳がわからないという顔をする僕らに気付き、一つ、咳払いをした。

「…あー、今日から来た、外国語の臨時講習を紹介する」

「イリーナ・イエラビッチと申します。皆さんよろしく」

自己紹介をしながらも、イエラビッチ先生は殺先生にべたべたとひつついている。

クラスの皆も、あまりのその様子に若干引き気味だ。

「本格的な外国語に触れさせたいと、学校側の意向だ。英語の半分は、彼女の受け持ちで文句ないな」

烏間先生は殺先生に確認するが僕たちの意思は尊重されないのだろうか。

「なんか凄い先生来たねえ…、しかもなんか、殺先生にすっごい好意あるっぽいし」

茅野の言葉に苦笑を禁じ得ない。

けれど、殺先生の方はどうなのだろうか。

疑問に思いながらメモ帳を取り出す。

「でもこれは、暗殺のヒントになるかもしれないよ。タコ型生物の殺先生が、人間の女の人にべたべたされても戸惑うだけだ。

いつも独特の顔色を見せる殺先生が、戸惑うときはどんな顔だ？」
目を細め、瞬きを忘れたようにじつと二人を見つめる。

数秒の間後、殺先生は、

——頬を紅くさせ、ピンク色になった。

「いや普通にデレデレじゃねーか」

「うん…なんの捻りもない顔だね…」

「うん…人間もありなんだ…」

とりあえず、殺先生の弱点に「おっぱい」と書き入れておく。

「ああ、見れば見るほど素敵ですわ…。その、セイロガンみたいなつぶらな瞳…。あいまいな関節…。私、虜になってしまいそう…」

「いやあ、お恥ずかしい…」

殺先生は照れていたけど僕らにはなに一つ理解できなかった。

一つだけわかることがあるとすればそれは…、

「(この時期にこのクラスにやってくる先生なんて、殺し屋ぐらいしか、あり得ない)」

休み時間、「暗殺サッカーボール」を行っていた。

先生はボールを受け止めながら生徒の強襲を避けていく。

——と、そこへ…

「殺先生——」

猫なで声を出しながら走ってくるイエラビッチ先生に、皆の動きが止まる。

皆の視線が刺さるのもお構いなしに、イエラビッチ先生は「殺先生！」と先生の触手を掴んだ。

狙ったような上目遣いで口を開く。

「鳥間先生から聞きましたわ。すっごく足がお速いんですって?…」

「いやあ、それほどでも無いですなあ…」

「お願いがあるの、一度、本場のベトナムコーヒーを飲んでみたくて…私が英語を教えるの間に買ってきてくださらない?…」

ピンク色になった先生はデレデレしながら「お安い御用ですよ」と本当にベトナムへ飛んで行ってしまった。

呆気にとられる間に終わりのチャイムが鳴る。

少しの間をあけて、磯貝君が戸惑ったように声を上げた。

「え、えーと、イリーナ先生？授業始まるし、教室戻ります…？」

——「授業？ああ、各自適当に自習でもしてなさい。」

「え？」

戸惑いの言葉を上げたのは誰だったか。

イエラビツチ先生は煙草を口にくわえ、火をつけながらめんどくさそうな目でこちらを見た。

「それと、ファーストネームで気易く呼ぶのやめてくれる？」

あのタコの前以外では先生を演じるつもりもないし…イエラビツチお姉様と呼びなさい」

……。

「で？どうすんの？ビツチ姉さん」

「略すな!!」

「(カルマ君…)」

彼は、なんとというか結構フリーダムに感じる。きつと気のせいじゃない。

「あんた殺し屋なんでしょ？クラス総がかりで殺せないモンスター。ビツチ姉さん一人で殺れんの？」

「ガキが。大人にはね、大人のやり方があるのよ」

見下した言い方。

彼女は僕たちをただのガキだと、自分より下だと、個人の性能を見極める価値さえないと、そう思っていることが一目で理解できた。

——不快だ。

心に生まれた嫌悪感を抑えていると、突然名前を呼ばれる。

「潮田渚ってあんたよね？」

「え…」

碌な返事も聞かず彼女は僕に近づいてきて、それで——。

ちゅっ

何故か僕と彼女の唇が触れた。

好き勝手に、けれど上手いやり方で暴れまわる彼女の舌。

そこで悟る。

きっと彼女はこういったやり方で数々の暗殺をこなしてきたんだろうと。

だけど、それに引つかかるのは肉欲に溺れたものだけだ。

だとしたら、彼女は運がいい。

だって、人の心理を動かすことを、してこなくて良かったのだから。だからこそわからないでいる。どうして僕が動じないのか。

不快な感情を抱いた者のキスなんて、戸惑いはすれど溺れることなどない。

目をつむっていた彼女が目を開けて、僕を見る。

そして唐突に突き飛ばされた。

「っー」

「え、あ…な、渚！」

駆け寄ってきた茅野にお礼を言いながら起き上がる。

再度見つめた彼女は、どこか怯えたような面持で僕を見ていた。

「…、っ、あ、あとで、あのタコの情報を持ってきなさい。」

あんたが一番あのタコに詳しいんでしょ？

その他も、有力な情報を持っている子は話に来なさい。良い事してあげるわよ？

女子には男だって貸してあげるし。技術も人脈も全てあるのがプロの仕事よ。ガキは外野で大人しく挿んでなさい。あ、そうそう、後…少しでも私の暗殺の邪魔したら、

———「殺すわよ？」

流石はプロの殺し屋だ、と思った。

彼女の殺気は本物だし。殺すという言葉の重みが僕らとは比べ物にならない。

「(だけど、)」

部下らしき人物を三人従える彼女に、僕らE組の大半は同じ感情を持った。

「(——この人は、嫌いだ)」

黒板には自習と言う文字だけが書かれており、肝心のビッチ姉さんはずっとタブレットをいじり続けている。

先ほど教えた弱点をもとにきつと殺先生の暗殺計画でも練っているのだろうか…。

耐えきれなくなったのか、前原君が声を上げた。

「なあビッチ姉さーん、授業してくれよー」

「そうだよビッチ姉さーん」

「一応ここじゃ先生なんだからビッチ姉さーん」

そうだそうだと声を上げるクラスの皆にビッチ姉さんは青筋を増やす。

耐えきれなくなったのか、教卓を叩きながら「ビッチビッチうるさいわね!!まず正確な発音が違う!!あんたら日本人は、vとbの区別もつかないのね!!」などと説教する始末。

「正しいvの発音を教えてあげるわ。まず、歯で下唇を軽く噛む!!ほら!!」

しゅしゅとといった感じで下唇を噛む皆を見て、ビッチ姉さんはニヤニヤと馬鹿にした笑みを浮かべた。

「そうそう。そのまま一時間過ごしていれば静かでもいいわ」

「(「なんなんだこの授業…!!」)」

「しっかし凄かったな、渚」

「え?」

次の時間、(結局あの後皆は自習をして終わった。)体育のため、鳥間先生の指示通りに皆でピストルの狙撃演習を行う準備をしている最中。

突然杉野に声をかけられる。

「え、じゃねーよ。ほら、前の時間、ビッチ姉さんにキスされてたじゃん。」

あんなだけ激しいキスされたのに、渚全くの無表情なんだもんなんー」
そんな僕は無表情だったのだろうか。

首をかしげながらもとりあえず肯定しておく。

「うん、…だって、僕あの人嫌いだし…」

「いやでもさ、あんなキスされたら流石に何かしら反応するだろ。」

お前ホントに男か？実は女とかそういうの？」

「あー、渚つてば中性的な顔立ちだもんね。髪も長いし」

「!!か、茅野まで…」

二人の言葉につくりと項垂れる。

ちよつとは…鍛えた方がいいのかな…。

「おいおいまじかー」

演習が始まり数分後、突然三村くんが声を張り上げた。

何事だ、と彼の指さす方を見ると、そこには殺先生とビッチ姉さんが二人でいるのが目に入る。

「二人で倉庫にしけこんでいくぜ」

「なーんかがっかりだよなあ、殺先生、あんな見え見えの女に引つかかって…」

「鳥間先生」

「ん？」

後ろに居る片岡さんが鳥間先生を呼ぶが、その視線はビッチ姉さんを睨みつけている。

「私たち、あの先生を好きになれません」

「…すまない。プロの彼女に一任しろとの国の指示でな。だが、僅か一日ですべての準備を整える手際…殺し屋として一流なのは確かだ

ろう」

鳥間先生はそう言うが…、

「…でも、いくら手際が良くても、人の気持ちを理解できない…プロに拘ってばかりの殺し屋はきつとどこかで失敗する気がします」

しん、とその場が静まり返る。

はっと思った時には遅く、クラスの皆の視線が突き刺さった。

「っ、す、すみません…」

「…いや、そうだな…」

しんみりとした空気になってしまったと後悔する。

どうしようと考えあぐねていたら、突然倉庫から銃声が響いた。

「!!!」

きつと、ビッチ姉さんの仕業だ。

何が起きているのかわからないが、それは数秒間続き、ふいに静まり返る。

不気味なほどの沈黙。

そして突然、

「いやああああああ!!!」

ビッチ姉さんの悲鳴が響いた。

「な、なんだ!?!」

「い、行ってみよう!!」

倉庫に向かって走り出す前原君の後を追う。

倉庫の前に付いたところで、中から殺先生が出てきた。

色がピンク色だ…。

「殺先生!」

「いやあ、もう少し楽しみたかったです…皆さんとの授業の方が楽しみですから」

楽しむ!?!何を!?!

「…な、中で何があったの…?」

訊ねた瞬間、倉庫の中からもう一人、人が出てきた。

ビッチ姉さんだ。

——が、

そのあまりの恰好に開いた口が塞がらなくなった。
ブルマ体操服に赤い鉢巻き。

一つに縛り上げられた髪。

ビ、

「ビッチ姉さんが健康的でレトロな服にされている!？」

どこか上の空な表情でビッチ姉さんはふらふらだ。

「ま、まさか、僅か一分であんなことをされるなんて…」

肩と腰をほぐされて、オイルと小顔のマッサージされて、早着替えさせられて…

その上まさか、触手とぬるぬるであんなことを…!!」

「「(どんな事だ!?)」」

「殺先生なにをしたの…」

「さあねえ、大人には大人の手入れがありますから」

「悪い大人の顔だ!!」

さあ、教室に戻りますよ、と先生の言葉に僕らは後を追う。

ちらりと目だけでビッチ姉さんを見ると、凄い形相でこちらを見ていた。

教室の中の空気が、重い。

殺先生の仕打ちが余程悔しかったのか、ビッチ姉さんは顔を鬼のようにしてタブレットをタップし続けている。

そしてクラスの皆はそんなビッチ姉さんの姿に嫌悪感を隠すことなく不満顔だ。

「っーああもう!!なんでWi-Fi入らないのよこのボロ校舎!!」

教卓を叩きながら怒鳴り散らすビッチ姉さんを横目に

開いた英語の教科書へ意識を集中させる。

ビッチ姉さんが自習を決め込んでいるのだから僕らにはどうしよ

うもない。

それこそ、言われたとおりに自習するしか――、

「それに、聞けばアンタ達E組ってこの学校の落ちこぼれだそうじゃない。勉強なんて、今更しても意味ないでしょ？ そうだ、じゃあこうしましよう？ 私が暗殺に成功したら、一人五百万円分けてあげる。」

無駄な勉強するより、ずっと有益でしょ？ だから、黙って私に従つ――」

こんっ、と乾いた音が響いた。

ビッチ姉さんが言い切る前に、何かが黒板に当たって落ちる。

――消しゴムだ。

ようやくクラスの様子に気付いたのか、ビッチ姉さんは生徒たちの睨むような視線にたじろいだ。

次の瞬間、誰かが「出てけよ」と漏らした。

そこからはタガが外れたように、色んな罵詈雑言、物が飛び交う。

「出てけよこいつ!!」

「殺先生と変わってよ!!」

「な、なによアンタ達!! 殺すわよ!」

「上等だやってみろよ!!」

「そーだそーだ巨乳なんていらぬ!!」

「そこ!」

茅野のセリフに思わず突っ込んでしまったが、僕は悪くないと思う。

それは一分ほど続いたが、やがてやってきた烏間先生に連れられ、ビッチ姉さんは出て行った。

生徒だけとなった空間で、皆は口々に愚痴を言う。

「…時間が余っちゃったし、暗殺バドミントンでもしよーぜ」

機員の言葉に皆はぞろぞろと教室を出ていくのに後をついていきながら、

「(鳥間先生が、なんとかかしてくれるかな…)」
そんなことを思った。

あの人も気苦労が絶えないなあ…。

本来ならばビッチ姉さんの授業だったけれど、肝心の本人は教室には来ない。

皆も休み時間と変わらないまま過ごしているし…。

「(あの人、どするのかな…)」

ぼーっと頬杖を付いていると、突然後ろから声をかけられた。

「渚君」

「!カルマ君…」

「どうしたの、ぼーっとしちゃって。もしかして、体調悪いとか?」

「え、ううん。大丈夫だよ?」

「本当?」

「うん」

そんなに心配すること無いのになあ…。

まあ前科があるからしかたないんだけど…。

——ガラ

突然、ビッチ姉さんが教室に入ってくる。

どうしたのか。

訊ねる前に黒板に向かって何かを書き出した。

書き終え、こちらに向き直ると、徐に——、

「You are incredible in bed. リピート
!」

——。

戸惑いながら皆は席に座る。

「ほらー！」

ビッチ姉さんに急かされて、彼女の言葉を繰り返した。

「アメリカでとあるビツプを暗殺したとき…まずそいつのボディガードに色仕掛けで接近したわ。」

そのとき彼が私に言った言葉よ。意味は——、

ベッドでの君は、凄いや」

「(中学生になんて文を読ませんだよ!!)」

呆れる間もなく彼女の演説は続く。

「受験に必要な勉強なんて…あのタコに教わりなさい。私が教えてあげられるのは、あくまで実践的な会話術だけ…」

もし、それでもアンタ達が私を先生と思えないなら…その時は、暗殺を諦めて出ていくわ」

その言葉は、暗殺のプロにとってプライドをすてた何よりの言葉なのだろうと、そう感じた。

彼女は今、僕らに真剣に向き合ってくれている。

確かに、あの先生を殺すのも大切だ。

けれど、僕らの「先生」をすることも、この場で大切なことなのだと理解して僕らの意思を尊重してくれている。

だから、「それなら文句ないでしょ…」と引き気味に尋ねる先生に、文句の声を上げる者は一人もいなかった。

ああ、きつとこの人とは…

「あと…悪かったわよ、色々…」

——うまくやっていける。

数秒沈黙。

突然、クラス全員が噴出した。

「なっ」

「なにビクビクしてんのさ。さっきまで殺すとか言ってたくせに」

「なんか、普通に先生になっちゃったな」

「もうビッチ姉さんなんて呼べないね」

「あ、アンタ達…わかってくれたのね」

「うん。呼び方、変えないとね」

涙ぐんだ先生は、感極まったように声を上げる。
けれど次の瞬間。

「じゃあ、ビッチ先生で」

彼女は固まった。

——前原君…それは…

「えっと、せつかくだから、ビッチから離れてみない？」

ほら、気易くファーストネームで呼んでくれて構わないから…」

「でもなあ、すっかりビッチで固定されちゃってるし…」

「うん、イリーナ先生より、ビッチ先生の方がしっくりくるよ」

「そんなわけでよろしく、ビッチ先生」

一人、また一人と皆がビッチ先生に挨拶していく。

ビッチ先生の顔はすでに鬼だ。

ついに怒りが爆発したのか、

「やっぱり嫌いよアンタ達いいいいいい！！！！」

ビッチ先生の叫びが、旧校舎全体に響いた。

——また、僕らのE組が賑やかになる。